# 文化財と技術 第9号

2019 年 2 月28日 印刷 2019 年 3 月 1 日 発行

編 集 鈴木 勉

発 行 特定非営利活動法人 工芸文化研究所

所長 鈴木 勉

発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所

所長 鈴木 勉

東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)

印 刷 千葉刑務所

千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)

# 『文化財と技術』

# 第9号

第一部 古代日本列島のものづくり

<環頭大刀>

上栫 武 岡山県総社市こうもり塚古墳出土の単鳳環頭大刀

金 宇 大 旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価

<三角縁神獣鏡>

鈴木 勉 三角縁神獣鏡の系譜論と製作地論から型式学を検証する 鈴木 勉 岡村・光武氏らによる金石学的三角縁神獣鏡論について

<鉄の加工技術>

黒木英憲 弥生時代の日本に特有で表面に長い溝 (=樋) のある

戈 (=鉾) すなわち「有樋鉄戈」の製法について

瀧瀬芳之 日本列島内出土象嵌遺物集成(刀剣・鉾・刀子編)

鈴木 勉 線刻鉄刀と象嵌技術

- 移動型渡来系工人ネットワークの手掛かり-

第二部 古代朝鮮半島のものづくり

李鮮明・南宮丞 扶餘陵山里寺址出土鏤金細工遺物の製作技術研究

鈴木 勉 たがねの切れ味から見える百済王興寺金銅舎利銘の製作背景

鈴木勉・金跳咏 新たに発見した三国時代の彫金技術と

「はがねの熱処理技術」の関係

第三部 古文化財学

河野一隆 装飾古墳からみた平福装飾陶棺の図像学的検討

塩屋公寛 考古資料のデジタル化と課題について

鈴木 勉 流通古文化財の闇

- 金印・誕生時空論と福岡市博購入印章の調査-

黒木英憲 提言:考古学研究者と金属に関わる

多くの科学技術者の協力を目指して

第四部 復元研究

比佐 陽一郎 藤ノ木古墳出土耳環の復元製作について

# 流通古文化財の闇

#### 一金印・誕生時空論と福岡市博購入印章の調査-

工芸文化研究所 鈴木 勉

#### はじめに-文化財の種類-

世に存在する文化財は、①出土品、②伝世品、③新発見資料、④流通古文化財の四つに分類できる。①出土品は、考古学的発掘調査によるもの、②伝世品とは、例えば七支刀など神社仏閣等に伝えられたもの、③新発見資料とは、倉庫、集積場、土中などから新たに発見されたもの、④流通古文化財とは、骨董店を通じて購入されたものである。②③④は、史料として用いる前に学問的な検証が必要であることは言うまでもない。近年、中国において「新発見資料」が多数報告されていることは注意すべきである。また、江戸時代から現代に至るまで「流通古文化財」が中国から我が国にもたらされているし、戦後混乱期の日本でも金工技術者は文化財の偽作で食いつないだという話が残っている。印章について言えば、例えば平凡社の『書道全集』に取り上げられた我が国の機関や個人が所蔵する中国古印のすべてが、元を辿れば「流通古文化財」であった。つまり、厳密に言えば、日本国内の全ての中国古印が江戸時代以降に我が国にもたらされた「流通古文化財」であったことは知っておく必要がある」。一点一点の流通古文化財の取り扱いについて慎重な対応が求められる。

#### 第一章 金印誕生時空論みたび

#### 1. 金印論の推移

金印の真贋について戦後の研究で何が実証され、何が推定されたのか。金印論の推移を見てみよう。 1956 年 「滇王之印」が出土する

1960年 東博の『日本国宝展目録』の解説には「中元二年の条に倭王に金印紫綬を与えた記事があり、この印はその記載にあたるものと考えられ、〈中略〉奴国にあてる説がある」とある。

1968 年 岡崎敬氏は論文「「漢委奴國王」金印の測定」で、「金印の一辺の平均値が 2.347 cmであること」を述べる。

1968年 毎日新聞社の「原色版国宝」には、「この金印がその折のものそれ自体であるか否かは実証できないが」とある。

1978年 東博の『日本の考古遺物』には、「この金印はそれ(光武が与えた印綬)にあたるものと推立されている」とある。

1981年 「廣陵王璽」印が、女性によってレンガ工場に積み上げられた土の中から発見される。

1982年 岡崎敬氏は論文「あらたに発見された「廣陵王璽」について -江蘇省邗江県甘泉二号墳-」で、「鈕にある魚子、薬研彫りの印文など共通するところが多く、洛陽の同一工房の製作になる疑いがもたれる」と述べる。

1984年 西谷正氏は、論文「漢帝国と東アジア世界」で、「一辺 2.3 cmの規格、篆文の字体、薬研彫

<sup>1</sup> 古印の中に、いわゆる偽作が含まれていることについては、先賢等がその都度指摘している。しかし残念ながらその判別法について記したものはない。例えば、曽我量深 1964「中国古印図録の刊行にあたって」『中国古印図録』大谷大学、神田喜一郎 1964「中国における古印鑑賞」『中国古印図録』大谷大学 206 頁、加藤慈雨楼 1986『漢魏晋蕃夷印彙例』2 頁、などがある。

りの印文、魚子の装飾など共通点が多く、それら二つの金印は、首都洛陽の同一工房において製作された可能性さえ指摘されている」と述べる。

1989 年 梶山勝氏は論文「金印と東アジア世界―「廣陵王璽」と「漢委奴國王」金印―」で、「文字の彫り方や字体もよく似ている。鈕の亀と蛇のそれぞれに施された魚子たがねの文様は、いずれも同一規格の鏨によって打ち出されたものである」と述べる。

1994年 大谷光男氏は、論文「漢・晋代の「王」字と埋葬印について」で、「製作上からみても、この両印は同一の篆刻家になるものであろう」と述べる。

1997年 『週間朝日百科 日本の国宝 23 号』には、「滇王之印が発見され、その根拠も弱くなった。 <中略>金印の印面は 2.347 cm四方の正方形であり、これは後漢初期の一寸に相当することが明らかにされ、真印説が定着するに至った。」とある。 (傍点は筆者による)

**太字**の4つの論考は、「漢委奴國王」金印の真印説への趨勢を作ったとさえ言えるのであろう。 そのため、この4つの論考について検証してみる。

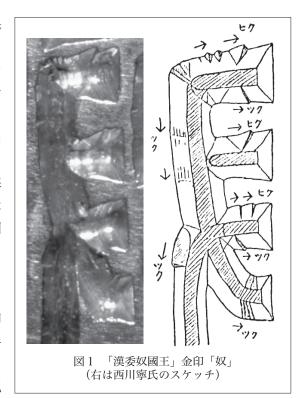
#### 2. 四つの真印説を検証する

# (1) 岡崎敬氏の一辺が 2.347 cmとの計測結果 に対して

岡崎氏が「漢委奴國王」金印の一辺が、漢代の一寸に相当するとしたこの論考は、長く考古学者たちの信頼を集めた。これに対し、三浦佑之氏は著書『金印偽造事件「漢委奴國王」のまぼろし』の141 頁から144 頁において、考古学者たちの信頼の無意味さを述べている。また、真印説を採る石川日出志氏も、江戸時代に漢代の一寸の印章は作ることが出来たと明言している。「漢委奴國王」金印の一辺が漢代の一寸と同じだから漢代に作られたとする論理はもはや通用しない。

### (2) 岡崎敬氏の同一工房説に対して

岡崎氏は、「漢委奴國王」印と「廣陵王璽」印について「鈕にある魚子、薬研彫りの印文など共通するところが多く、洛陽の同一工房の製作になる疑いがもたれる」と述べ、考古学的な簡易な観



察から「同一工房製作説」の可能性を「疑いがもたれる」と表現した。

私は、溝に残るたがね痕を観察し、「疑いがもたれる」と表現した岡崎氏説を検証した。

加工痕を観察した西川寧氏のスケッチには文字線の溝の両側には異なるたがね痕が描かれており<sup>2</sup>、これは拡大写真でも確認できる(図 1)。溝の両側を別々に彫ってその形を忠実に再現するの

<sup>2</sup> 西川寧 1952「金印の刻法」『書品』28

だが、こうした技法を彫金では「さらい彫り」という。一方新発見資料³である「廣陵王璽」印では、 溝の両側と底部の三カ所の加工痕が一致していることが分かる(図 2)。これは一度の加工で溝を 彫る「線彫り」の一種で「溝たがね」(図 3)が使われたことが分かる。



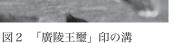




図3 溝たがね



図4 彫金初体験の学生のさらい彫り

さらい彫りと線彫りの違いはどこにあるのだろう。さらい彫りでは、確かな下書きがあって(こ れを布置という)その輪郭に沿って彫るので、下書きによく似せて彫ることができる加工法である。 一方溝たがねによる線彫りは、文字線の両側と底の三面を同時に彫るため、下書きの文字線の輪郭 に沿って彫ることは不可能である。図4は学生が行ったさらい彫りの実習成果である。学生は彫 金の初心者で、90 分の実習のわずか二時限目であった。下書きには長谷寺法華説相図版の文字が 使われた。この文字は、唐の欧陽詢の息子欧陽通が遺した「道因法師碑」の文字によく似ていると 評されたこともある美しい文字である。それをさらい彫りの下書きに使うと、わずか二時限目の実 習でもとても立派な文字を彫ることができた。線彫りで彫った文字は二時限目ではかたちにならな かった。

さらい彫りは、書者が刻者よりも優位にあり、線彫りは刻者が書者よりも優位にある製作システ ムである。二つの印は、全く異なる製作システムの工房で作られているのだ。これほど製作システ ムが異なる二つの印章を「同一工房での製作」とは決して言えない。加工痕を詳しく観察すること で、同一工房製作の可能性は否定された。

#### (3) 梶山勝氏説に対して

梶山氏は、「文字の彫り方や字体もよく似ている。鈕の亀と蛇のそれぞれに施された魚子たがね の文様は、いずれも同一規格の鏨によって打ち出されたものである」と述べ、岡崎氏説の補強を図っ た。梶山氏のいう「同一規格の鏨」について鈴木は検証を試みた。

円文の外径と内径を写真から計測して表1の結果を得た。内径の値がよく似ていて「同一規格 のたがねが使われた」と考えてしまいがちである。しかし、円文たがねについて詳しい知識があれば、 この数値が全く異なる二つのたがねを示していることがわかる。内径が同じ寸法で、外径が異なる 二つの円文を同一のたがねで施文するには図5左の内側が勾配の無い刃形が必要である。ところが、 実際に使う円文たがねは、図6の様に二辺の角度が同じになるように作られる。図5のたがねでは、

打ち込んだときに外側から大きな応力 が発生し、刃先が内側に折れてしまう からだ。したがって内径が同じで外径 が異なる円文は異なるたがねで施文さ れたことになる。

表 1 金印の円文の外径と内径				
外径 (mm)	内径 (mm)			
1.47	0.76			
1.23	0.73			
2.01	1.43			
	外径 (mm) 1.47 1.23			

<sup>3</sup> 鈴木勉 2010『「漢委奴國王」金印・誕生時空論 金石文学入門 I 金属印章篇』雄山閣、63 頁

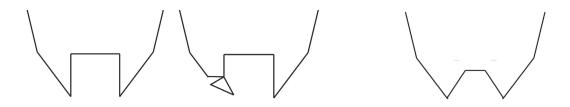


図5 円文たがねの断面(内側円が垂直で、刃先が折れる(右)) 図6 円文たがねの断面(二辺の角度が同じ)

考古学では、「似ている可能性がある」→「よく似ている」→「同一規格の工具」→「同一工房・同一工人」などといつの間にか扇情的に語られていくことがよくある。あの三角縁神獣鏡研究も同じ道筋を辿った。学史を振り返れば、「似ている鏡」がいつの間にか「全く同じ」となり、同笵法や同型法が提起され、いつの間にか同一工房・同一鋳型で作られたことになってしまった。似たものは、何処が同じで何処が異なっているのか、慎重な検討をしなければならない。日本の考古学はこうした誤り⁴によって50年以上遅れてしまった。円文たがねは、誰が作ってもよく似た形になり、個性が表れにくい。安易な同一工房、同一工人説が生まれやすいとも言える。考古学的な同一工人・同一工房・同一鋳型などの検討にはより詳しい観察眼が求められよう。

この検証作業によって、両印の円文の施文には異なるたがねが使われたことが明らかになった。

#### (4) 大谷光男氏説に対して

大谷氏説は、「製作上からみても、この両印は同一の篆刻家になるものであろう」とするが、これは岡崎氏説と梶山氏説に影響を受けて、同一の篆刻家へと飛躍させてしまったものと考えられる。 両説の誤りによって大谷氏説はその根拠を失うことになった。

#### (5) 真印説の検証の結果

「漢委奴國王」金印の真印説に導いたとも言える四つの論考について検証を行った結果、いずれもその分析方法に誤りがあることが明らかになった。つまり、「漢委奴國王」金印を漢代に製作されたとする論考の根拠が全て失われたのである。さらに安本氏が提示した文字線の端部へ向かって肥となる特徴は、中国では明清代以降、日本では江戸時代以降に現れる大きな特徴である。もはや、「漢委奴國王」金印を真印と考える根拠はすべて失われた。

#### 3. 新たな視点で真贋を問う

#### (1)「廣陵王璽」印は新発見資料であり、流通古文化財印と技法的に近似する

1981年「廣陵王璽」印の出現によって「漢委奴國王」印の真印説は勢いを増したのであるが、その理由となった円文たがねの同一性や技法の近似性は、前述のように否定された。また、「廣陵王璽」印は新発見資料であり、なおかつ溝たがねによる線彫り印である(図 2)。藤井有鄰館「関中侯印」印(図 7)と「平阿侯印」印(図 8)も線彫り印であり、流通古文化財である。これらの金印三顆に疑義を呈したい。

<sup>4</sup> 鈴木勉 2016『三角縁神獣鏡・同笵(型)鏡論の向こうに』雄山閣

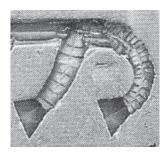


図7 藤井有鄰館「関中侯印」印の溝



図8 「平阿侯印」印の溝

「廣陵王璽」印は、報告書では、光武帝の弟である劉荊が廣陵王に封ぜられた時に帝が自ら与えた印章と解説されている。となれば「廣陵王璽」印の文字は皇帝の文字である。中国における文字彫刻技法は、亀甲獣骨文の時代からさらい彫りが行われ、金文や後漢代の石碑など古代の文字彫刻はさらい彫りである<sup>5</sup>。そもそも古代中国においては、文字は神との情報伝達手段として発生し、後に皇帝の文字となる。その線画の形の重要度は極めて高い。さらに、「廣陵王璽」印が「劉荊が廣陵王に封ぜられた時に帝が自ら与えた印章」であるとすれば、「廣陵王璽」印は皇帝の印であり、皇帝の文字である。それを線画の形を忠実に彫ることが出来ない線彫り技法で彫るとは考えられない。先に述べたように「廣陵王璽」印は、「出土品」であるかのように取り扱われているが、報告書を読めば出自が不確かな「新発見資料」にすぎないことが分かる。新発見資料は近年の中国では唐代の石碑や晋代の蛇鈕の「蛮夷矦印」金印など、数多く報告されている。「蛮夷矦印」金印は、報道では1990年に「出土」とされているが、「1990年湖南平江县梅仙镇钟字林的钟姓农民在挖土烧砖时发现的"蛮夷侯印"金印」と解説されるようにその出自は「廣陵王璽」印と全く同じレンガ工場の土の中から発見されたものである。いずれも史料としての取り扱いには注意が必要である。そして「廣陵王璽」印は他の流通古文化財と同様の線彫り印である。その真贋を検証しなければ史料としては扱えない。

#### (2) 線幅率を比較する

印面のデザインを布置と言うが、その主要な点に文字線の幅がある。印章の文字線の幅は単純に 寸法で示すことができない。時に天地左右の寸法が変化する印章の、布置における文字線の幅は、 文字線の太さと二本の文字線に挟まれた地の部分の太さの比率で考えることが出来る。

「線幅率=文字線の太さ/地の部分の太さ」である(図 9)。それも印面の大きさや文字の画数によってばらつくので、ここでは最も文字線が密な部分の線幅率を計測する。

漢印の中で「漢委奴國王」印ほど大きな線幅率の印章はない(表 2)。「漢委奴國王」印の 500% という線幅率は丁寧なさらい彫りで初めて可能となる。「腰取りたがね」の使用が推定されるところである。

中には印譜の文字を使って線幅率の計測をして筆者に反論を試みようとする向きもあるが、そもそも印譜は、元の印章を押印し、さらにそれを木版に翻刻するものもあって、印章はその度に「転写」を数限りなく繰り返す。印譜に示された線幅が元の印章の線幅を反映してはいない。したがって公刊された印譜を使って線幅率を計測することができないことは、異なる印譜に載っている同一の印章の文字線を比較すれば一目瞭然である。

<sup>5</sup> 鈴木勉 2013 『造像銘・墓誌・鐘銘 美しい文字を求めて一金石文学入門 II 技術篇―』雄山閣

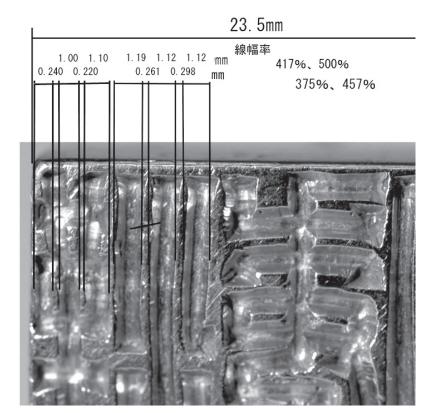


図9 線幅率=文字線の太さ/地の部分の太さ

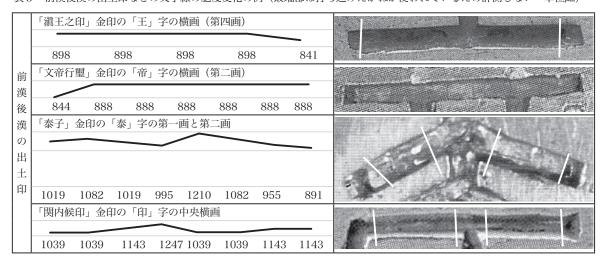
	表 2	線幅率の比較		
印章の名称	時代	最大(%)	最小 (%)	平均 (%)
漢委奴國王	新発見資料	500	279	377
廣陵王璽	新発見資料	228	182	191
平阿侯印	流通古文化財	195	125	144
関内侯印	流通古文化財	220	84	128
滇王之印	出土品、前漢	200	111	144
文帝行璽	出土品、前漢	177	94	141
関内侯印	出土品、後漢	325	114	189
関中侯印	出土品、西晋	133	29	63

#### (3) 「端部へ向かって肥となる文字線」について

「漢委奴國王」印の線画には出土古印にはない特徴がある。一本の線画内の肥痩(文字線の太さ)の変化である。

表3,4,5及び図10~16に出土地が明らかな印章について、文字線の肥痩の変化を計測し図化して示した。「滇王之印」(前漢・雲南省出土)「文帝行璽」「泰子」(前漢・広東省出土)「関内侯印」(後漢・湖北省出土)「関中侯印」(後漢・湖南省出土)の文字線は、肥痩に変化はほぼない(表3)。一方、江戸時代に製作された「左近衛権少将」印、「敬止」印、「源治昭印」印はどれも線画が端部へ向かって肥となる(太くなる)特徴が現れている(表4)。また、狩谷棭斎旧蔵「狩谷望之」印、同「卿雲氏」印も線画が端部へ向かって肥となる特徴を持っている(図10)。「漢委奴國王」印も同様に「文字線の端部へ向かって肥」となっていて、江戸時代製作印章と同様の特徴を持っていると言える。また、中国明清代の篆刻資料を見てみよう。明の汪關、清の汪啓淑、鄧石如、呉煕載、徐三庚、趙之謙の印章はどれも、「文字線の端部へ向かって肥となる」特徴を持っている(図11~16)。

#### 表3 前漢後漢の出土印などの文字線の肥痩変化の例(最端部は打ち込みたがねが使われているため計測しない 単位畑)



#### 表4 「漢委奴國王」金印と江戸時代印章の文字線の肥痩変化(最端部は打ち込みたがねが使われており計測しない 単位」加)

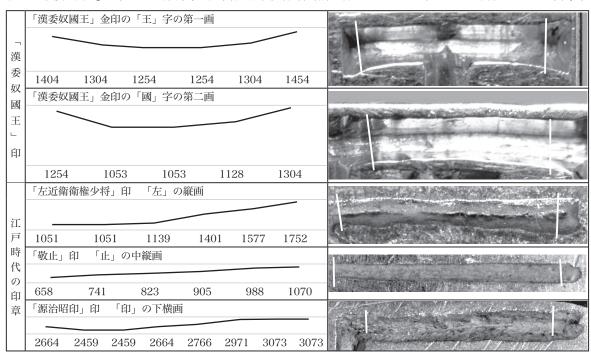




図10 狩谷棭斎(1775年~1835年)旧蔵「狩谷望之」印と「卿雲氏」印



図11 汪關(1614年前後)作「馮時可印」印



図12 汪啓淑 (1728年~1799年) 作 「繞屋峯ばん三十六」印



図13 鄧石如 (1743年~1805年)「筆歌墨舞」印



図14 呉熙載 (1799年~1870年) 作「呉廷颺印」印



図15 徐三庚(1826年~1890年)作「桃華書屋」印



図16 趙之謙 (1829年~1884年) 作「何傳洙印」印

表5 「廣陵王璽」印の文字線の肥痩変化の例(端部は打ち込みたがねが使われているため計測しない 単位/㎞)

廣陵王璽」印	「廣陵王璽」印 「王」の第三画 1102 1102 1133 1102 1072 1102 1102 1102	
	「廣陵王璽」印 「王」の第四画 1124 1094 1094 1109 1140 1109 1140 1294	
	「廣陵王璽」印 「廣」の第三画 1114 1083 1083 1052 1099 1052 1083	
	「廣陵王璽」印 「璽」の第一画 1127 1127 1142 1080 1017 1064 1064 1064	

「廣陵王璽」印の文字線はどうであろうか。鈴木は、本稿の3の(1)項で「廣陵王璽」印が溝彫りたがねによる線彫り印であることを指摘したが、線彫り技法で「文字線の端部へ向かって肥と」する場合、文字線を深く彫らなければならないが、「廣陵王璽」印の文字線の深さはほぼ一定である。

「廣陵王璽」印の文字線は端部に打ち込みたがねを打っているため端部だけが肥となっている(表 5)。これも古印には見られない特徴である。一方、「漢委奴國王」印では、さらい彫り技法を駆使 して文字線の深さに変化を与えずに文字線の肥痩を表現している。さらい彫りであるからこそ、そ れができるのだ。

#### (4)「漢委奴國王」印の製作工程と駝鈕改作説

各部位に残る加工痕から製作技法を推定する。

- ① 円文底部の「砂目」(図 17) は鋳型の砂が転写したのではなく、金が凝固する時に生成される肌である。したがって円文は円文たがねをろう型に押しつけて施文された
- ② 円文の一部に「オーバーハング」がある(図 18)ため、円の施文後へら押しなどの仕上げ加工が行われた
- ③ 「けずり痕」(図 19)、たがねと金槌を使った衝撃的な力が加わる彫金の加工法ではない。 つまり、円の施文の前、つまりろう型に対して行われた加工である

以上のことから、ろう型鋳造の製作工程は表 6 の左側(1)~(6)が考えられる。大塚氏の駝鈕 改作説が仮に妥当として考えると、印を「翻沙(型取り)」して蝋原型を作る工程(表 6 の右側(1') ~(5')が(1)~(6)の前に加わる。「翻沙」の技法は宋代以降金属製品の偽作に盛んに用いられた $^6$ 。

	X O NAME TO A STATE OF THE STAT			
	ろう型鋳造法による製作工程		駝鈕改作説に伴い追加される製作工程	
(1)	蜜ろうなど、柔らかい素材で原型を作り	(1')	ある駝鈕印を寒天などで包み、	
(2)	けずり加工、円の施文などを行い	(2')	寒天が固まった後、駝鈕印を取り出す	
(3)	その原型を真土などで包むように鋳型を作り	(3')	寒天に溶かした蜜ろうを流し込む	
(4)	金銀を溶かして鋳型に流し込む	(4')	蜜ろう製の印章 (ろう製原型) が出来上がる	
(5)	たがねなどを使って印面の文字をさらい彫りする	(5')	ろう製原型の駝鈕を削って蛇鈕に改変する	
(6)	へらや布を使って鈕など表面のツヤを出す			

表 6 「漢委奴國王」金印の想定される製作工程

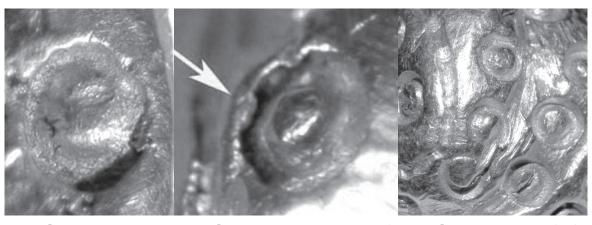


図17 「漢委奴國王」印の砂目 図18 「漢委奴國王」印のオーバーハング 図19 「漢委奴國王」印のけずり痕

大塚氏の駝鈕改作説は江戸時代にこそ相応しい製作方法だといえる。氏も論考で「どのような経緯で蛇鈕に整形されたのか、、、判断できる材料はない」と述べる $^7$ ように、後漢代に駝鈕改作をし

<sup>6</sup> 神田喜一郎 1964「中国における古印鑑賞」『中国古印図録』大谷大学 206 頁

<sup>7</sup> 大塚紀宜 2008「中国古代印章に見られる駝鈕・馬鈕の形態について―中国古代印章 2・付編―」『福岡市博物館研究紀要』 18 号

たとする必然性は見あたらない。

#### (5)「漢委奴國王」印の製作地について

「線幅率」「端部へ向かって肥となる文字線」「駝鈕改作説」などで「漢委奴國王」印が近世の印章の特徴を色濃く持っていることを述べてきた。しかし、「近世」という範疇にはその製作地については論じることをしていない。厳密に言えば、その製作地は日本の江戸時代でも可能であるし、中国清代でも可能である。その製作地と製作者については、中国の篆刻家も視野に入れて考えなければならない。その製作背景から考えても、中国で作られて日本の九州に持ち込まれた可能性は極めて高いと考えざるを得ない。「漢委奴國王」印は、日本か中国の近世に作られた可能性があると言える。

#### 第二章 流通古文化財について

#### 1. 福岡市博物館購入金属製印章の調査

#### (1)調査用具と印象の素材

福岡市立博物館は平成 10 年度に№ 001 ~ 231 の 231 顆、同 12 年度に№ 600 ~ 632 の 33 顆、

13年度にNo. 495~522の28 顆、合計292 顆を骨董商を通じて購入した。鈴木は、2013年と2017年の2回に亘って全購入印章の溝の加工技術について調査した。

調査用具は、ルーペ、等倍マクロレンズ、一 眼レフカメラ、デジタルマイクロスコープなど を用いた。

表7	印章の素材(福岡市博一覧表に。	はる)
	素材名	数量
	ガラス	1
非金属	玉	1
	コークス	1
	銀	6
金 属	銀 or 白銅	3
	銅(銅鍍金3を含む)	280

印章の素材は表7の通りである。非金属と金属で同じような加工痕が見られたため、今回は全ての印章 292 顆を検討対象とした。

#### (2) 二段彫り加工の痕跡とマイクログラインダー(以後「MG」)の加工痕

筆者が過去に調査した金属製印章の溝は、その断面形などから、薬研彫り、丸彫り、箱彫り、鉢彫りなどに分類された(図 20)。ところが、市博購入印章にはそういった加工痕は少なく、その多くが二段彫りと言えるものであった(図 21)。また、溝の中に、円形の加工痕を見出すことができた(図 22  $\sim$  25)。円形の加工痕は、回転系の工具の跡であり、現代の「MG (マイクログラインダー)」の跡と思われる。

図 26 は、昭和 60 年前後のころ、筆者が、教え子である中国残留孤児のご子息からプレゼントされた石製印材の鈕である。彼は中国で 12 才の頃から 35 才 (当時) くらいまで「MG」での石製印材の彫刻加工を生業としていたという。「MG」は、日本では昭和 40 年代の頃から金属加工分野で使われるようになっていた。

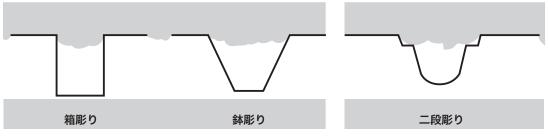


図20 箱彫り、鉢彫りの断面図

図21 二段彫りの断面図

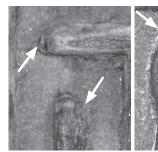




図22 No.19「正行」印とNo.289「漢盧水佰長」印の二段彫り



図23 No.23「上官憙」 印の二段彫り

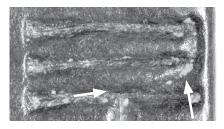


図24 No.631「魏率善羌邑長」 駝鈕銅印の二段彫り

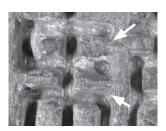


図25 No.619「韓中君」熊鈕銅印の二段彫り



図26 中国残留孤児子息の 石製印材の鈕部分



図27 エッチング技術による印刷用の写真製版(右端に「MG」)

次に二段彫りの浅い平坦な部分(図 22、図 23 の矢印部分)はどのような加工法で作られたのだろうか。こうした文様や文字の転写に使われる技法は、フォトエッチング技術が想起される。印章の表面に光硬化樹脂を一様に塗っておき、同時にフィルムに印章をデザインしておく。印章の表面にフィルムを通して紫外線を露光させる。洗浄すると露光して硬くなった樹脂が残り、露光しなかった樹脂は除去される。それを腐食液(希硝酸や塩化第二鉄の溶液)に漬けると樹脂が無い部分は腐食される。長い時間漬ければ深い腐食となるが文字線の境界は乱れやすくなる。そのため、腐食はなるべく浅い加工で済ませる。腐食が終わると、表面の光硬化樹脂を剥離剤で除去する。こうして一段目の浅い溝が出来上がる。そこへ「MG」で溝を深く彫ると、断面U字形の溝ができ、二段彫りとなる。古色(古び)を付ければ偽造印章の出来上がりである。たまたまエッチング技法の写真を探していたところ、写真版と「MG」が一緒に写っていた(図 27)。フォトエッチング技術と「MG」の技術はセットの技術であったのだ。

#### (3) 二段彫りと円形の加工痕が見える印章の数量と割合

市博購入印章 292 顆のうち、二段彫りの加工痕と円形の加工痕を持つ印章の数を数えた (表8)。

なんと 265 顆を数え、全体の 90%余りが偽造印章であることが判明した。90%余りの印章は同一のエッチング工房で作られた

	表8 二段彫りと円形の加工痕が見える印章の数と割合			
加工痕の特徴		数量	292 顆に対する割合	
二段周	りの加工痕が見える	261 顆	89.4%	
円形の加工痕が見える		237 顆	81.2%	
二段周	りも円形の加工痕も両方無い	27 顆	9.2%	
二段周	りと円形の加工痕、どちらか見える	265 顆	90.8%	

可能性がある。その他の 10%足らずの印章が、偽物でないということではない。薬品によると思われる腐食が激しくて二段彫りと円形の加工痕が見えなかっただけで、それらの疑惑が晴れたわけではない。つまり、市博購入印章の推定 100%に近い印章が、21 世紀における偽作だということが出来よう。

#### (4) 福岡市博物館購入金属製印章の共同調査の実施

2018年1月20日、その翌日に開催する予定であったシンポジウム『「漢委奴国王」金印を語る~真贋論争公開討論~』に先立って、真印説の石川日出志氏、大塚紀宜氏、本田浩一郎氏、偽印説の三浦佑之氏、鈴木、司会の朝日新聞の中村俊介氏、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏がデジタルマイクロスコープと共に加わり、福岡市博物館において同博物館購入金属製印章の共同調査を実施した。すでに一度調査を終えている鈴木が解説に立ち、大塚氏ら真印説を採る人たちが論考の史料として用いた印章から検討に入った。比佐氏によるマイクロスコープで印章の文字線の溝を液晶画面上に映し出し、加工痕跡を拾っていった。そこには紛れもなく「二段彫り」と「円形の加工痕」が確認された。その後数十点の印章の溝について同様の調査をしたが、いずれも「二段彫り」と「円形の加工痕」が確認された。さらに20世紀の流通古文化財に多く見られた「たがね」の加工痕は確認できなかった。福岡市博購入金属製印章のほとんどが昭和末年から平成にかけて偽作されたものであることを誰もが認めることとなった。

#### 2. 真印説提唱者石川日出志氏、大塚紀宣氏、高倉洋彰氏らの型式学への過信

2012年12月5日に明治大学で行われた公開研究会「「漢委奴國王」金印研究の現在」において、私は「考古学は実物を見て、その真贋から入る。そのなにか血筋のわからないものを見たときに、それをそのまま資料に使うというのは、考古学者としておかしいんではないかなと、私は思います」と発言した。すると、石川氏は「真贋を判断するのは分類によるのだということでした。つまり集めた資料を分類していって、そこからはじかれたものが出てきたときにこれをどう説明するか。そこで初めて真贋、これは危ないからはずそう、という判断ができるのであって、それ以前に最初っからこれは危ないからはずそうといった判断をおそらく考古学はしないんです」と発言した。高倉氏も大塚氏もそれを肯定した。前述のように、その後私が市博購入印章を調査した結果、その殆どが現代の偽作であることが分かった。大塚氏の論考では、市博購入印章の中から五顆の印章を扱って「漢委奴國王」金印の後漢製作説を唱えているのだが、五顆の印章は全て偽物であることは、大塚氏も石川氏も認めている。その論考の誤りは火を見るより明らかである。高倉氏も石川氏も大塚氏も口をそろえてかつて主張したように、考古学の分類で偽物を抽出できるのだそうであるが、現実には一点も偽物の印章をはじき出すことができていない。こうなると改めて、三氏の「型式学的分類」とはいったい何なのか、と改めて考古学界に問いたいと思う。「型式学的分類」を主に用いる考古学の信頼を揺るがす事態である。考古学者たちはどう答えるのであろうか?

#### 3. 流通古文化財の闇の深さ

先に述べたように、江戸時代以降我が国にもたらされた中国古印は、厳密に言えばその全てが「流 通古文化財」である。注意すべきは中国では少なくとも宋代以来、偽物が作られ続けていることで

<sup>8</sup> 鈴木勉・高倉洋彰・大塚紀宣・石川日出志 2015「公開研究会<「漢委奴國王」金印研究の現在>質疑応答」『古代学研究所紀要』 第 23 号(明治大学古代学研究所)147 頁

ある。そして福岡市博物館が平成時代に入って購入した「流通古文化財」292 顆の 100%に近い印章が戦後に作られた偽物であることが判明した。そのほとんどの印章に「MG」という昭和時代後半に開発された工具が使われた痕跡が発見されたのである。

ここで注意していただきたいのが、21世紀の偽印の製作者が、印章を購入する際に関わった多くの研究者を欺し通せたことである。かつて鈴木は中国古鏡の偽作者の技量の高さについて記したことがある。偽作された神人車馬画像鏡はほとんど全ての現代の日本の鏡研究者を欺した<sup>9</sup>のだが、今回の印章の調査結果はそれと全く同じであった。もはや偽作者と研究者の戦いは、偽作者に分があると言うしかない。ここで強調したいことは、研究者等を欺し通した偽作者らの、歴史学的水準の高さを知っておかなければならないことである。つまり、福岡市博で購入した古印の全てが印章史の上からは完璧な出来映えであったということであり、印章の購入に関わった研究者の目には全て妥当な古印に見えたということである。この購入に関わった研究者の名誉のためにも申し上げたいことは、これらの印章の型式は完璧なまでに再現されていたことである。現代の考古学者が遺物の観察を型式学的にしか見ていないことが問題であって、その加工痕まで見なかったことが反省点と言うべきであろう。真贋の判定だけでなく、歴史学の資料として加工痕にもとづく遺物の観察は考古学の必須な調査方法だと主張したい。

現代の技術者である偽作者だけでは、これだけ水準の高い偽物を作ることは不可能だと言えよう。その後ろには印章に極めて詳しい印章史研究者の存在が見え隠れするのである。このように、江戸時代からの伝統を持つ日本の印章史が、仮に中国の偽造集団に操られているとすれば、歴史学を根底から揺るがす可能性のある大きな問題である。

明治末年から昭和の初めに至る頃に数多くの印章が中国からもたらされている。そうした 20 世紀の流通古文化財の多くが偽作である可能性がある。今回の調査で、21 世紀の流通古文化財が100%に近い割合で偽作であることが判明している。となれば、20 世紀の流通古文化財にも同様の疑いをもって調査し直さなければならないだろう。20 世紀の流通古文化財である印章は、日本の多くの博物館が所蔵している。かつてそれらの印譜を刊行した博物館では、その中に偽物が含まれることまでは明確に指摘しているが、その判定の方法までは述べていない。

日本の長い印章史研究にも影を落としかねない今回の福岡市博蔵金属製印章の調査であった。これは、印章史にとどまらない中国古銅器など流通古文化財を取り扱う古代史に大きな警鐘を鳴らす結果である。私たちは流通古文化財の闇の限りない深さを改めて認識することとなった。

以上

<sup>9</sup> 鈴木勉 2010『「漢委奴國王」金印・誕生時空論 -金石文学入門 I 金属製印章-』70 頁